

生徒指導体勢確立のための条件：問題事例への対応から探る

著者	原田 年康, 原田 唯司
雑誌名	静岡大学教育学部研究報告. 人文・社会・自然科学篇
巻	61
ページ	309-327
発行年	2011-03
出版者	静岡大学教育学部
URL	http://doi.org/10.14945/00005677

生徒指導体勢確立のための条件

－問題事例への対応から探る－

Conditions to Establish the Pupils' Guidance System in School:
Exploration through Dealing with Problematic Cases

原 田 年 康*・原 田 唯 司*
Toshiyasu HARADA & Tadashi HARADA

（平成22年10月6日受理）

要 約

家庭・地域や関係機関と連携して取り組む生徒指導体勢のあり方を、3つの生徒指導上の問題事例から導き出した。事例の背後にある問題を成立させている規則的な繰り返される流れ（循環）を明らかにし、その循環を弱めたり止めたりするには、その問題を取り巻く人間関係を重層的（学級システム、学校システム、外部システム）に構築し直すことが大切である。また、そのシステムが機能するには、それに関わっている人たちによる生徒や保護者が抱いているネガティブな感情理解が必要である。

キーワード ネガティブな感情 循環 学級システム 学校システム 外部システム
生徒指導体勢

I はじめに

生徒指導の問題は、児童生徒を取り巻く社会環境の変化に伴って、多様化、複雑化している。それに伴い、学校教育現場では、「担任個々人の指導」から、家庭・地域を含む関連機関との連携のもと、「全校体勢で取り組む指導」が求められている。

平成22年3月に発表された「生徒指導提要」でも、学校を中心とする、家庭・地域・関係機関の連携について、「学校における組織的対応」「情報連携から行動連携」「保護者の協力」「日常の協働」などの重要性が指摘されている。また、平成22年3月、国立教育政策研究所生徒指導研究センターで発行された「生徒指導の役割連携の推進に向けて～生徒指導主事に求められる具体的行動～」の中でも、教職員間の合意形成を中軸にすえた校内の指導体制のあり方について提言されている。

しかし、学校教育現場においては、問題行動への対処における表面的な情報連携はかなり進んできているが、生徒や保護者がおかれている状況や抱えている感情まで理解した「一歩踏み

*：教育実践高度化専攻

込んだ情報連携」や「行動連携」までには至っていない。学級担任や生徒指導主事などによる個人任せの生徒指導から、関係者間の連携に基づいた組織的な生徒指導へと移行していくための条件について検討することには意義があろう。

そこで、これまでに関わった3つの問題事例（「虐待が背景と思われる、すぐキレルA男への対応」「母親との関係に悩むB子への対応」「『いじめ』を受けて不登校になり、それに伴って母親がクレーマーとなった転入生C子への対応」）をあらためて分析する中で、問題を成立させている背後にある要素とその要素間の関係性を明らかにし、今後学校教育現場ではどのように生徒指導体勢を確立させたらよいかを検討するための手がかりを本稿においてまとめることとした。

なお、本稿で取り上げる3つの事例は、第1筆者が平成20年3月まで公立中学校に勤務していたときに出会ったものである。第2著者は事例の解釈・意味づけを第1著者とともに行った。本稿をまとめるに際し必要な情報については、あらためて関係者への「聞き取り調査」を行った。

II 問題事例の分析

1 「虐待が背景と思われる、すぐキレル

A男」へ対応の事例

(1) 事例の概要

些細なことですぐキレルA男（他市からの転入生）について、当時の生徒指導記録簿から概要を述べる（平成19年8月29日から平成20年3月中旬まで）。

8/29 前在籍中学校の学年主任と生徒指導主事来校。A男の状況と転校についての経過説明。
（資料1）

8/29 校内生徒指導委員会で対応についての基本方針を協議（資料2）

8/30 「転入手続きをしたい。」と母親から電話が入る。それを受けた教頭が、校門で、母親、A男、成人男性（車の運転手、母親の彼氏）の3人を出迎える。

8/31 始業式の前日 母親の携帯に、教頭が、「明日は始業式です。教職員、お待ちしております。」と連絡をする。

9/1 新学期 母親とともに登校。

9/12 隣の生徒の消しゴムがなくなった事

資料1 学年主任（前学校）からの説明

- ① 1年の6月頃から不登校
- ② 些細なことでキレル。小学校では毎日のようにキレた。中学校では回数は減少してきている。
- ③ A男が2歳の時、両親が離婚、母親に引き取られる。
- ④ 母親は男性と夜遊びすることが多く、A男のめんどうをあまりみない。小5まで、祖父の家にあずけられる。
- ⑤ 小5の3月、母親と二人で暮らし始める。
- ⑥ 中1の5月頃から、再び、祖父にあずけられる。母親が男友達と遊び回る。その頃より不登校になる。
- ⑦ 学校、祖母、親族、民生委員からの指導と借金から逃れるため転校してきた。

資料2 対応の基本方針

- ① 他市の教育委員会と連絡を取り、「生徒指導上の問題」、「就学指導上の問題」についての情報を収集する。
- ② キレたときの対応方針
 - ・別室でクールダウンをさせる。
 - ・組織的に対応する。「対応する人」、「連絡する人」、「A男以外の生徒を指導する人」、「記録する人」等
 - ・外部機関（市教委、医療機関）との連絡
 - ・保護者やPTAの連絡
- ③ 日々の生活では、学年の教職員を中心に、A男とその母親との人間関係づくりに努める。

件。担任が知らないかと問いかけると、疑われたと思いきれる。悪態をついて、校舎内を徘徊する。

- 9/15 部活動無断欠席事件。顧問が同級生に呼びに行かせたところ、その生徒に向かって「お前らに言われたくない」と答えた。
- 9/19 遅刻事件。険しい顔で登校する。直ちに、別室に入れて、教頭が話を聞く。話の概要を資料3に示す。A男の話を受けて校長と教頭が、母親と面談をした。母親の話の概要は資料4である。

資料3 9/19 A男の話

- ① 15日（部活動無断欠席の日）、祖父の家にあずけられる。
- ② 祖父の家にあずけられたときは、母親は遊びに行くことが多く、淋しい。
- ③ 母親の彼氏（義父）については、おもしろくない。「あいつ（義父）のことは言うな」と言う。

資料4 9/19 母親の話

- ① 彼氏との間に子どもができ、2月出産予定である。このことは、A男には話をした。
- ② 2歳頃、A男に父親が暴力をふるう。A男を守るため離婚した。
- ③ 離婚後、A男を祖父にあずけて、タクシーに乗って働くようにした。そのため、A男を面倒を見ることができなかった。申し訳ないと思っている。
- ④ 9/15、父親がA男に会いたいと言ってきたが、会わせられないから、祖父の家にあずけた。

10月～

- 11月 学級担任は、A男との人間関係づくりのため、週に2～3日程度、前在籍校での数学の未履修部分を家庭訪問で指導する。
- 11/10 部活の時間、じゃれ合いが発展し、生徒間暴力がおきる。指示的な介入をした男性教師に暴言を放つ。
- 12/05 同級生とけんかで、相手が先にA男に手を出す。その時、教頭が、「よく我慢したな」と介入した。この頃から、ネガティブな感情を受け止めることを第一とする指導を心がけるようになった。
- 1月末 出産中のA男の生活を心配して教頭が母親に電話をする。出産中は、母親の友だちにあずけることを聞く。母親の友だち宅に、教頭が、挨拶にうかがう。
- 3/10 同級生に挑発されたと感じてキれる。「悔しいことがあったのか」と教頭が介入する。数分で落ち着き、涙ながらに、資料5のことを教頭に打ち明けた。
- 3/?（日にちは不明）
母親の彼氏（夫、義父）から、

資料5 3/10 A男の話

- ① 小4～6 担任から殴られる。図書室に入れられた。
- ② 小5のとき、担任が家庭にきて、家から引きずり出された。
- ③ 小4で病院に連れて行かれ、何か調べられた。私が異常か調べているようでいやだ。
- ④ 俺は教師を憎んでいる。

以上を聞いた教頭は、「気持ちを話してくれて有り難う」と伝える。

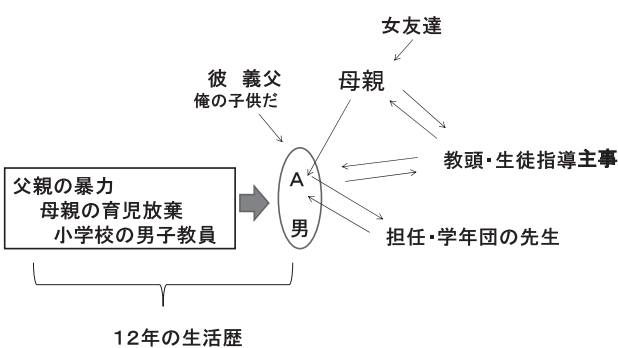


Fig. 1 Aを男取り巻く人間関係

「お前も、俺の子だ」ということを言われる。

- ・ 3/10以降、翌年の卒業式までキレることはなかった。卒業の日には、「小学校当時の学級担任からの手紙」と「小学校時代住んでいたアパートの叔母さんから手作りの卒業証書」が送られた。後日、感激の一日となったことの報告を受けた。

(2) 事例解釈の視点1：キレることでA男及びその母親にどんなことが起きていたか。

「生徒指導記録」と「聞き取り調査」に基づいて事象の背後で起きていることについて以下のような視点から解釈を行った。なお、A男を取り巻く人間関係はFig. 1のようになっている。

①キレたとき、A男にはどのようなことが起きていたか。

A男はどのような背景でキレたであろうか。9/19の母親の話(資料4)で、「② A男が2歳の頃、父親から暴力をうけ、その暴力からA男を守るために、離婚したこと」、さらには、「③A男を育てるため、タクシーに乗り、A男に関わるができなかったこと」などが明らかとなった。

大河原(2004)によれば、幼児期にネガティブな感情が言葉との繋がりをもちチャンスがないままに成長してしまうと、怒りをコントロールできずに攻撃的になったり、極端な二面性を示したり、身体感覚が分からなくなったり、自分の感情が分からなくなったりする、とされている。

A男も、幼い頃、父親の暴力、さらには母親による育児への関わりの薄さなどにより、十分な愛着形成がされず、言葉と感情の解離が生じていた可能性がある。その結果、

A男の心には、周りの環境の中で抱かれた怒りや不快感などのネガティブな感情(以後、「N感情」と呼ぶ)が、言葉との統合が図られなかったり、母親の愛着によつて癒されたりすることがないままに成長過程の中で溜め込まれていったと考えられる。N感情の表出に対して周囲が柔らかく受け止めて適切な命名を与えたり(「そんなに怒ってはダメ。」など)、言葉で思いを認めたり(「イヤな気持ちになったのはよく分かるよ。」など)された経験が乏しい場合、N感情をどこまで他人に対して表示してよいのかを自分で調整する力を身につけることが困難になる。そのようなときに、A男のように、「小学校での周りの子どもとのトラブル」や、「教師の高圧的介入」といった怒りの着火剤となるような刺激にさらされた結果、N感情をうまく表出できない、つまり、怒りがコントロールできない現象として現れたととらえられる。

このことは、資料6(聞き取り調査①)

「キレたとき、どんな暴言をはなったか」やまた、資料5(3月10日 A男の話)からも、推察できる。

つまり、A男の心には、周りの生徒との些細なトラブルに教師が高圧的な介入をすることで、過去のN感情が沸き起こり、それを自分で抑えることができずに

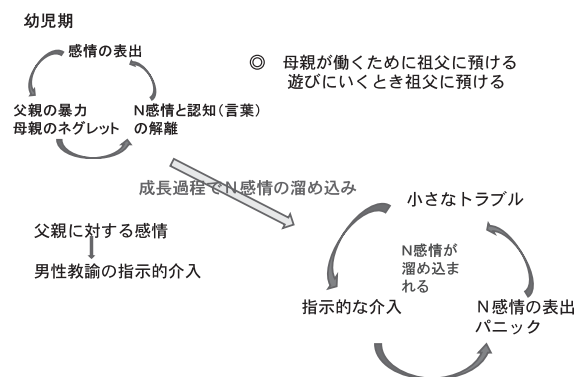


Fig. 2 キレるとき、A男の心の中でどんなことが起きていたか

資料6 聞き取り調査①

「キレたとき、どんな暴言を放ったか」

A教員…最初のキレたときの感想は、男性教諭に対して、非常に防衛的で拒否的だったと感じた。
「おまえは、たばこくさいな。どこかへ行け。関係のないおまえがなぜ入ってくるだ」と言った
B教員…「おまえは お節介だ」と言った。
C教員…「先生は、関係ないだろ。関係ない。来るな。」と言った。

キレてしまう。その状態に対して、周囲はA男に対してさらに強圧的・懲罰的に対処する。その結果、A男は、キレることで、今まで以上にN感情だけが内部に蓄えられ、自己肯定感がよりいっそう失われていく。これが繰り返されたのではなかろうか (Fig. 2)。

このように、A男がキレてしまう背後に、ある一定の規則性のある流れが繰り返されているととらえることが可能である。N感情の蓄積 → トラブルの発生 → キレる → 周囲の無理解・高圧的指導 → N感情の蓄積 → 次のトラブル発生・・・というような形で、A男にとっては「キレることで傷ついていく循環」が生じたのではないかと考えられる。A男の場合のように、N感情など内的な状態と周囲からの圧力など外的な状態とが相互に影響し合いながら、全体として一つの方向で回転し、成長の過程の中で何度も繰り返される流れのような状態にあることを本稿では「循環」と呼ぶこととする。A男には、「キレることで傷ついていく循環」が生じていたと解釈することができる。

②A男がキレるたびに母親の心にはどんなことが起きていたか。

転入時、母親に、「A男の転校で、どんなことを望みますか」と問うと、「みんなと仲良く生活してほしい」と即答した。また、前学校の主任の説明(資料1)では、「⑦ 学校, 祖母, 親族, 民生委員からの指導と借金から逃れるため転校してきた。」とも述べられている。これらから、学校と母親の間には、A男がキレたことに伴って、大きな距離感が生じていたものと思われる。

A男がキレたとき、母親に対して状況説明や諸注意を学校としては行うのが一般的である。それを母親がA男に話してもA男は受け入れない。感情と言葉とが離れているA男にとって、学校の説明を理性的に理解しても、N感情はおさまるものではない。かえってN感情だけが強められてしまう。また、母親にとっても、いくら話してもA男が変わらないため、A男に対するN感情だけが溜め込まれていく。こうしたことの繰り返しによって、母親にとっては、「A男に対して無力感が強められる循環」が生まれたのではないだろうか (Fig. 3)。その結果、母親と学校との距離は一層離れていったのではないかと考えられる。

(2) 事例解釈の視点2：転入後、A男とその母親にどんな変化が起きたか。

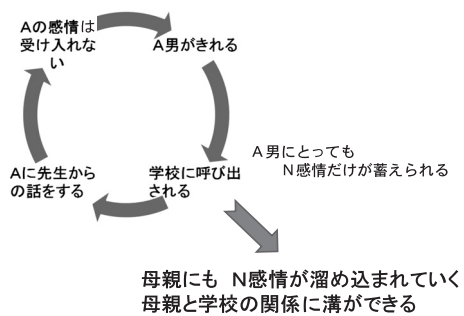


Fig. 3 転入前まで、A男の母親の中でどんなことが起きていたか

資料7 家庭生活の変化

転入前の家庭生活

- ・ 親子の二人で、雇用促進住宅に住んでいた。
- ・ 母親は昼間働きに出ていて、留守にしている。
- ・ 休日や夜、男と遊びに出ることが多く、その時、A男は祖父のところに預けられる。
- ・ 家で一人であるか、祖父の家に預けられているなど、淋しい感情が溜め込まれている。

転入後の家庭生活

- ・ 義父, 母, A男, 弟の4人暮らしとなる。
- ・ 義父が働きに出て、生計を支えている。母親が家にいることが多くなる。
- ・ A男は、夜、義父とゲームして遊ぶことが多い。
- ・ 弟が生まれ、弟の面倒を見るが多くなる。
- ・ 弟が生まれる頃までは、義父に対していい感じを抱いていなかったが、その後、義父が、「A男も、俺の子どもだ」と言い、A男に落ち着きが見られるようになった。

①家庭生活はどのように変わったか

転入を契機に、資料7のように変化した。一人で淋しい思いをしていることが多い生活から、いろいろと気遣いをすることが多くはなったが、義父、母親、弟との4人の生活へと変化した。このことは、転入後の家庭生活において、A男にとっての新たな人間関係が構築されたことを示している。

②転入後、A男への教師の関わりはどのように変化したか

当初の生徒指導委員会での方針（資料2）のもと、母親とA男との人間関係づくりに、全職員体勢で取り組んだ。

母親との関係では、教頭を中心に、「転入手続きに来校したときの玄関の出迎え」、「始業式前日、母親に『明日はお待ちしています』と連絡」、「A男がキレたときにも、学校に呼び出すことなく、家庭訪問して状況を説明したこと」、「毎週、ちょっとした現れ、特に、我慢していること、頑張っていることなどをきめ細やかに家庭連絡をしたこと」など、母親との関係づくりの手だてをできるだけ具体場面での具体的行動の形で示すようにした。特に、教頭は母親の妊娠時「体を大切にしておよ」、「お産の時、A男をどうするの？」などという言葉の掛けることによって気遣いを示し、さらには、お産時にA男が預けられる女友達宅にも挨拶にも行ったりもした。また、リストラの嵐が吹き荒れている社会状況の中で「旦那さんリストラにあっていないでしょうね」など、家庭生活までも踏み込んだ電話も入れた。このようにA男がキレていないときの母親との関係づくりを大切にしたい関わりを関係教員がそれぞれの立場で取り組んだ。

A男との関係は、当初は、キレたとき指示的な指導をすることもあったが、それはキレ（パニック）を大きくするだけで何の効果もないことが分かりだし、徐々に、N感情に寄り添うことを第一とした介入へと変わっていった。12月5日、相手が先に手を出したときなど「よく我慢したな」と認めたり、3月10日、今までも溜め込んできたN感情を吐露した時は、「気持ちを話してくれてありがとう」とA男の感情を受け止めたりした（資料5）。また、学級担任も、「気持ちを聞いてやるから、手を出すのだけはやめなさい。」と、感情理解に寄り添うように留意した。また、日頃のキレていないときのA男との関係づくりを大切にしたい。1年時の担任は、前学校で不登校気味になって数学が遅れていることに気遣い、家庭訪問による数学の指導を行った。また、担任は、資料8のようにA男の感情を大切にしたい日々の指導に心がけた。

その他、部活動（テニス部）においても、他の生徒との関係が充分にできあがっていないため、練習相手を顧問自らが行うなども配慮した。

③家庭、学校での人間関係はどう変化したか

ハイダー（1958）は、自己、他者、第三者の関係がどのようになると安定するかというバランス理論を述べている。この説は、2者間が好意的関係の時+、非好意的な時は-と表

資料8 聞き取り調査② 学級担任

「日常、A男にどのように接していたか」

昼休み、教室に残っていると、必ず、A君は私のそばに来て、世間話をし出す。その周りには、何人かの生徒が集まりだし、いろいろと話題が広がっていく。その話題の中には、A君の感じ方や考え方がおかしいこともあるが、それを否定せずに受け止めていると、他の生徒がA男の考えを批判してくれる。知らず知らずに、A男の考え方が子どもたちの中で修正されていく。また、帰りの会終了後、部活動に行かず一人残っているときが時々あった。その時は、「私に何か言いたいことがあるだろう」ととらえ、「どうしたの」と話を聞いてやった。いろいろと愚痴をもらしてすっきりした気持ちで帰って行った。

したとき、その3つの積がマイナスの時は、3人の関係は非安定な関係となり、プラスの時は安定した関係となるという考え方である (Fig. 4)。

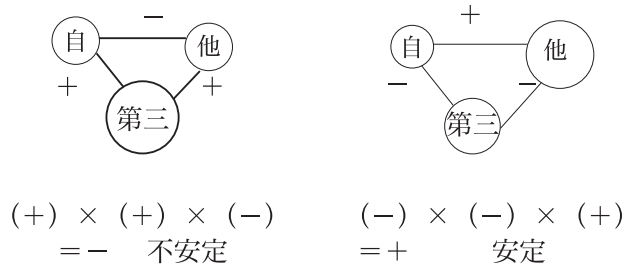


Fig. 4 ハイダーのバランス理論

家庭内の人間関係を見てみると、「義父と母親と弟の関係」は多分安定の関係にあることは誰もが想像できる。「義父と母親とA男との関係」は、「母親とA男が+」「義父と母親が+」も予想される。問題は、「A男と義父」の関係である。転入直後では、「あいつ（義父）のことはいうな」と教頭と言っていたが、家庭で義父とA男が一緒になってゲームをしたり、3月頃、「おまえも俺の子どもだ」と義父がA男に言ったりしたこと、かなり「+」に改善されていったに違いない。その結果「義父と母親とAとの関係」は、安定の方向へと向かっていった。

学校における学校・母親・A男の関係の変化は、教員の対応により、次のように変わったと考えられる (Fig. 5, 6)。

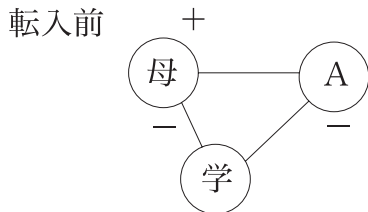


Fig. 5 転入前のバランスの関係

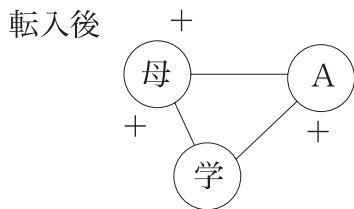


Fig. 6 バランス関係の変化

転入後は、母親、A男、学校、の3者間の積は+となり、バランスが安定したと言えよう (Fig. 6)。

このように、家庭生活や学校生活において人間関係のバランスが図られ、A男とその母親の中に起きていた「キレることで傷ついていく循環」や、「A男への無力感が強められる循環」

— 転入前の母親、A男、学校とのバランス —

- ・ A男と母親とは親子の関係で+である。
- ・ A男と学校の関係は、A男の話によると「図書室に閉じこめたこと」「不登校の時、家から引きずり出されたこと」から、キレたとき指示的な介入がなされ、N感情が蓄積され、「-」の関係である。
- ・ 母親と学校の関係は、前任校の主任の話によると、「学校、祖母、親族、民生委員から指導と借金から逃れるため転校してきた。」から「-」の関係である。

転入前3者の関係の積は、+になる。A男が不登校気味になることで、A男にとっても、母親にとっても、3者のバランスは安定していた (Fig. 5)。しかし、それを学校や民生委員等が心配し、介入指導に入ったため、バランスが崩れ、前在籍校からの転校の流れができた。

— 転入後の母親、A男、学校とのバランス —

- ・ A男と母親は親子の関係で、さらに母親が家庭にいたことが多く、+である。
- ・ 母親と学校の関係は、前述のように家庭生活まで心配した教頭の関わりによって+となった。
- ・ A男と学校の関係は、キレた時、N感情に寄り添うよう介入したこと、また、担任や部活動顧問によって、N感情が溜め込まれないように配慮したり、周りの子どもとの関係が円滑にいくように配慮したりすることで、+に変化していった。

は少しずつ弱まり、3月10日（A男が本音を教頭に吐露した時）以後、一度もキレることはなかった。

以上から、本ケースは、好ましくない循環とアンバランスな対人関係がA男のキルる行動の発生を強化しているという問題構造の転換を図るために行った学校の支援行動、すなわちA男に対してはN感情を受け止め、理解し、共感することを基本とする対応と、母親に対しては関係教職員との関係づくりを基本に、一貫した姿勢で対処するといった取り組みが、A男とその母親を変えていくことにつながったケースである。

2 母親との関係に悩むB子への対応

(1) 事例の概要

B子が小学校4年生の時に両親が離婚し、父親と暮らすこととなった。中学校の入学式（平成17年4月）の折、「母親に会いたい。」と泣き出し、それを機会に、母親、姉の3人暮らしとなった。大きな問題は起こさなかったが、スカートを短くしたり、眉を細くしたりなど、生活指導上で注意されることが、時々、あった。何かにつけて担任に話しかけ、人なつこい生徒であった。友だちも多いが、その会話の中心はB子の話題になることが多く、自己中心的なところもあった。

2年生になると、遅刻したり、学校を休みがちになったりすることが時々見受けられた。その都度、学級担任が家庭訪問し、B子の気持ちを受け止めていた。担任からの「聞き取り調査」によると、B子と母親の様子は、資料9のようであった。

担任と母親との関係は、B子が所属している部活の顧問が担任ということもあって、日頃、会う機会が多く、気軽に会話をすることができる状況であった。B子の生活が乱れた時など、「仕事は、昼間にしてほしいこと」、「夜の仕事を控えるようにしてほしいこと」、「次の日に学校があるときは、節度を持ってほしいこと」などを、担任が母親にお願いをすることもあった。その都度、母親も、B子との接する時間を多くとるよう努力はしてくれた。

2年生の半ば、B子の生活記録に、資料10のようなことが書かれた。

この日記を読んだ担任は、直ちに、ケーキを買い、翌日、部活終了後、体育器具庫でそのケーキをB子に差し出した。B子は号泣してケーキを食べた。

3年生も11月末になり、B子にとっては精神的に不安定な状況が続いた。受験期ということもあって、担任は心配し、B子と面談した。この頃、母親が家に帰ってこない日が多いことが分かった。姉は見切りをつけて父親の家にお世話になるようになった。その結果、一人であることが多くなり、淋しいと漏らした。心配した担任は、B子の気持ちを母親に伝えるために

資料9 聞き取り調査③

「B子とその母親の様子」

- ・ 母親は、昼間はパチンコに興じており、夜は飲み屋で働いている。その結果、家をあけることが多くなる。夜、姉と2人きりになる。また、朝、母親がいないこともあって、起きられず、ついつい学校に行くのが面倒になる。
- ・ 母親と母親の彼氏と、日曜日など、部活を休んで、遊びに行くことがある。その時は、夜遅くなることが多く、次の日は起きられない。

資料10 2年時のB子の「生活記録」より

今日は誕生日である。お母さんと一緒にお祝いをしたかったと思って、メールをした。すると、母親からは、「今仕事中、忙しい。何を考えているの!」と返事がきた。

「今の気持ちを素直に文章に書いてみなさい。」と投げかけると、資料11のような手紙が届いた。

この手紙を見て、緊急の学年会、生徒指導委員会が開かれた。市教委、児童相談所等と連絡を取るとともに、緊急避難として、父親に面倒を見てもらうことがいいであろうとの結論に達した。教頭が母親と会い、冬休み中、B子は父親の家で暮らすことを母親に了解してもらった。

冬休みも終わりに近づき、B子の3学期及び今後の生活をどうするかということ、関係者で話し合うことが差し迫っての課題であるという認識から、校長、教頭、学年主任、担任、父親、母親の6人が顔を合わせて話し合うこととなった。

母親以外全員、定刻に集まった。心配した父親が母親に電話をすると、「仕事が忙しくなかなか行くことができない。」との話であった。「全員集まっているから、どんなに遅くなっても、私たちは待っているから、学校に来なさい。」と

強い口調で父親が言った。母親が学校に来るまでの間、B子を高校卒業まで面倒を見てよいことなど、母親への愚痴を漏らしながら父親が語ってくれた。約1時間遅れて、母親が到着した。以下、話し合いの一部である。

この会議以降、B子は、表面的には落ち着いた生活を取り戻し、無事、高校進学を成し遂げた。

資料11 B子から担任への手紙

今日家に帰ったら、お母さんがいたから、一緒にご飯を食べられると思ったら、男の人のところに行ってしまった。

週末に、家を掃除して、全部、ピカピカにしました。それは、自分のためだけけど、やっぱりお母さんのためでした。お母さんに、男のところに行かずに、早く家に帰りたいって思ってもらえるためでした。

この前も今も、掃除も、洗濯も、ご飯も、何もしていないままで、いつもむかついていて、それに耐えられなくなって、お父さんのところに行った。お姉ちゃんの行動は正解だと思った。

お父さんの方で暮らせば、確かに幸せはあると思います。実際行ったときも、「自分が動かなくても、こんなにやってくれるんだ」と思いました。お母さんとしての仕事や優しさを忘れていたことに気づきました。

でも、私は、お母さんを信じたい気持ちがあります。今は家で、朝も、夜もひとりぼっちだけれど、「淋しい」とか、弱音を吐かなければ、自分のことは心配させないようにすれば、お母さんは戻ってきってくれると思うからです。

裏切られるのは慣れているから、そうしたら、私がお母さんを支えたいです。

資料12 受験を前にして「B子の生活をどうするか」の話し合い会議

教頭：「お母さん、何か心配なことはないかね」

母親：「どちらをとっていいか」

教頭：「どちらをとるって？」

母親：「私には、現在、外に彼氏がいるのですが、その彼氏も捨てられないし、B子とも一緒に生活をしたいいし、どちらを選べばいいか、分からない。」

教頭：「もう少し詳しく」

母親：「私には、多額の借金がある。それを返すために昼も夜も働かなければならない。彼氏はその借金とB子を面倒見てくれるわけではないし、私一人で返さねばならない。B子と一緒に暮らしたいが、借金を返すために昼夜働かないと、なかなかB子の面倒がみれない。彼氏とも別れられない。」

教頭：「両方とればいい。あなたの気持ちに素直になって、B子も、彼氏も両方とればいいと思うよ。でも、そうなるとB子の生活が問題になるので、B子は父親に預けて、定期的に外で会えばいい。父親もB子を高校卒業まで経済的に面倒を見ると言っているから。お母さんは、彼氏と一緒に借金を返せばいい。借金が返したら、その時、B子を気持ちを大切に、

今後どうするか、考えたか？」

母親：（顔に微笑みが浮かんで）「お父さんが了解してくれば」

主任：「お母さん、この話は、B子に誰も話せません。お母さん自身が話す以外ありませんので、頑張ってください。」

母親：「今、B子と一緒に生活できる状況ではない。一緒に生活できるようお母さんも頑張るから、B子さんも、お父さんのところで生活してください。必ず、呼びに来るから、いいね。このように話したいと思います」

(2) 事例解釈の視点：B子及びその母親にどんなことがおきていたか。

B子とそれを取り巻く人間関係は、Fig. 7 のようである。

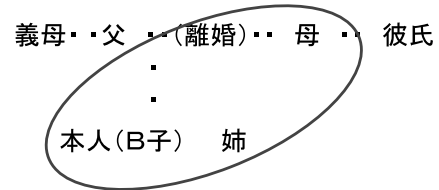


Fig. 7 B子を取り巻く人間関係

① B子の心にはどんなことが起きていたか。

B子は、母親を「掃除も、洗濯も、ご飯も、何もしないままで」と手紙にも書いているように、駄目な人ととらえている。そのような母親でも恋しい。家で待っていても帰ってこない。その淋しさに耐えきれず、父親の家で生活してみる。すると、そこで義母がやってくれることで、「お母さんとしての仕事や優しさを忘れていたこと」に気づく。その優しさによって、母親を恋しく思う気持ちが強められる。母への恋しい気持ちを抱いて、自宅で、母親を待つが、いっこうに母親は戻ってこない。母親への恋しさが、母親が帰ってこないことで、より一層、淋しさへと変化し強められていく。淋しさのあまり、再び、父親宅に行く。このように自宅と父親宅を往復することで、淋しさと恋しさが相互に強められ溜め込まれていく（「B子の母親への思いの循環」Fig. 8）。

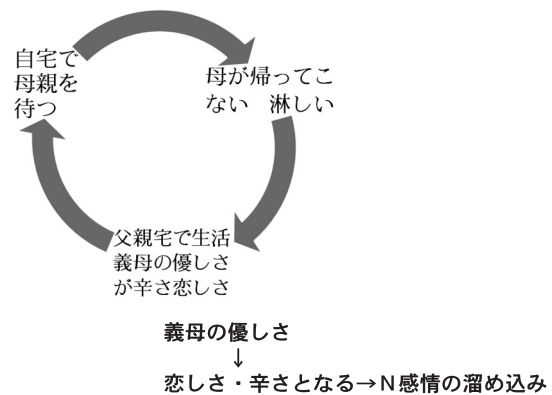


Fig. 8 B子の心の中には、どんなことが起きていたか。

② 母親の心にはどんなことが起きていたか。

教頭が、B子の手紙を、母親に見せた。その時の様子は、「聞き取り調査④」（資料13）のようであった。その調査から、母親には次のようなことがおきていると解釈される。

母親に「一緒に食事しよう」とB子からメールが入る。B子の思いは汲めても、借金と彼から離れられないため、家には簡単に帰れない。この2つの狭間で、母親は苦

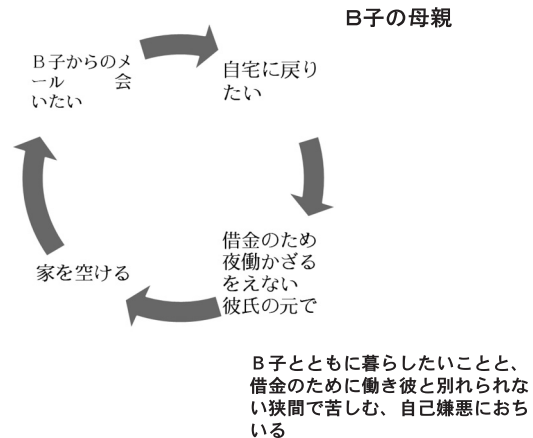
資料13 聞き取り調査④

「手紙を見て、母親の様子はどうかであったか」

B子からの手紙を見て、涙ながらに、母親は、次のようなことを言った。

B子のことは気にしている。B子の思いも大変よく分かる。私は、駄目な女です。多額の借金はあるので、働かざるを得ない。さらに、彼からも離れられない。B子と一緒に生活したいが、難しく申し訳ない。

しんでいる。B子の淋しさと恋しさがメールで母親へ伝わるたびに、母親は、置かれている状況を作り出した自己、それを簡単に変えることができない自己に触れ、「自分は駄目な女」という自己嫌悪の世界へと陥っていく。つまり、B子の「母親への思いの循環」が回れば回るほど、B子からの母親への働きかけが強められ、母親の苦しみが深まり自己嫌悪が強まっていくのである（「母親の自己嫌悪の循環」Fig. 9）。



③ B子を取り巻く人間関係はどう変わっていったか。

Fig. 9 母親の心にはどんなことが起きていたか

受験を前にして、「B子の将来」について、関係者による話し合いの場が設けられた。それまでは、「B子の母親への思いの循環」と、「母親の自己嫌悪の循環」の両方に関われたのは、学級担任だけであった。「母親の自己嫌悪の循環」を止めたり和らげたりすることはできなかったが、「母親への思いへの循環」のN感情を受け止めることは担任はしていた。担任への聞き取り調査（資料14）からも、そのことが分かる。

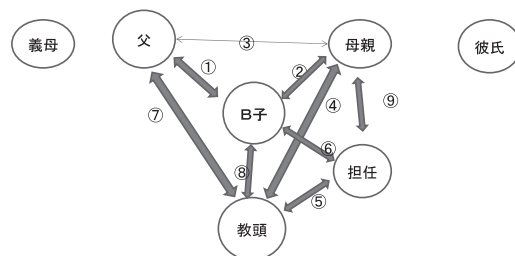
資料10の「誕生日のケーキエピソード」をはじめ、ことあるごとに、母親代わりを担任はしてきた。充分とはいえないまでも、B子の気持ちにより添い癒すことはできたに違いない。あくまでも、担任の関わりは、母親とB子との3者の間だけであった。

「B子の将来について」の話し合いで、関係者が一同に揃う中で、「B子の経済的な側面は父親が面倒を見ること」「定期的に母親は外でB子と会うこと」と2つのことが了解された。B子の将来に向けての前向きな話し合いは、誰もが、B子の孤独で切ないN感情を温かく受け止め、さらには、集まった関係者の苦しい立場や状況をも相互に理解し合うこととなった。それらにより、今まで、独自にB子に関わっていた状況から、B子の将来に向けて「父親－母親－B子」「父親－B子－教頭」「B子－教頭－担任」「B子－担任－教頭」「B子－母親－担任」の人間関係のネットワーク（Fig. 10）が再構築された。その結果、「B子の母親への思いの循環」や「母親の自己嫌悪の循環」は弱められと考えられる。

資料14 聞き取り調査⑤

「B子に関わるエピソードで思い出すことは」

学力調査テストの時、朝、登校していなかったのですぐ家庭訪問した。B子は昨夜、母親が家に帰ってこなかったの、待っていた。朝も起きられなかった。担任はB子に服を着替えさせ、途中で、「おにぎり」を食べさせて、学校に連れてきた。



父 母 B子 担任 教頭 の間にそれぞれ トライアングルが形成された

「①⑦⑧」「②⑧④」「⑥⑧⑤」「④⑥⑨」の関係が、高校進学を前にして、再構築された。

以上から、本ケースは、母親が置かれて

Fig. 10 B子を取り巻く人間関係のネットワーク

いる状況（借金と彼から離れられない状況）が「B子の母親への思いの循環」と「母親の自己嫌悪の循環」を生み出しているという問題構造を、B子の未来に向けて、B子とその母親のN感情を受容し、それを支え合うという人間関係のネットワークが関係者の間に構築されることで、弱まっていったという事例である。つまり、B子の抱いている「母を思う切なさや淋しさ（孤独）」と、その母親が抱いている「自分は駄目な女だという自己嫌悪などの感情」を、関係者が温かく受け止め、B子の未来に向けてできることで支え合うという支援体勢のが確立されたことが大きな要素になったと考えられる。

3 「いじめ」を受けて不登校となり、それに伴って母親がクレーマーとなった転入生（C子）への対応

（1）事例の概要

平成18年、夏休みが終わろうとする8月、ある母親から、「現在、他県の中学校に在籍している子ども（C子）の母親ですが、子どもの転校を考えています。学校見学をお願いしたい。」との電話が入った。何か特別の事情があるのではないかと考え、その在籍校に連絡をとった。直ちに、教頭が来て、資料15のような説明をした。

特別事情のある転校なので、教育委員会との連携のもとに取り扱うこととした。特に、「いじめ」「クレーマー」と難しい問題を抱えた転校であるだけに、「学校」と「子ども、保護者」を結ぶ第三の機関が必要であると考え、市教育委員会相談室に積極的に関わってもらうこととした。市教育委員会との話し合い内容は、資料16である。

10月の中旬、市教育委員会の一室で、転校の事情説明が行われた。転校校にもなって、前在籍校で受けた「いじめ」さらには「不登校」等の辛いことが少しでも解消されることへの期待を、学校、行政が一体となって、受け止めてくれたことに、母親が涙を流した。

11月から本校に転入した。病弱な

資料15 前在籍校の教頭の説明

- ① C子は病弱で、入退院を繰り返してきた。
- ② 1年生の途中、美術部内のトラブルを契機に学年内での「いじめ」で不登校気味となり、親がクレーマー化した。学校側に5項目の要求書を突きつける。
- ③ 2年生6月学級内のトラブルから不登校となる。

資料16 前在籍校の教頭の説明

「転校にあたっての教育委員会との話し合い内容」

- ① 前在籍校の代表者、転校受け入れ側の校長、学年主任、転校する子どもの保護者、教育委員会の責任者が一堂に会した場で、転校にあたって事情説明を受ける。
- ② 保護者と子どもは、教育委員会相談室に定期的に連絡を取り、相談を受ける。
- ③ 学校も定期的に指導経過を教育委員会相談室に報告をする。
- ④ 教育委員会相談室は、「学校」と「子ども、保護者」の関係について調整する。

資料17 部活動のトラブルをきっかけに

「いじめ」、「親のクレーマー」の概要

C子は、1学期は、8人の女の子のグループに属していた。その子たちが部活動内で勢力をもって、他の子どもたちに文句を言っていた。1年生の10月頃から、その文句がトラブルとして表面化しはじめ、C子はそのグループから少しずつ離れていきはじめた。しかし、部活動内では、トラブルが続き、顧問が部活動のあり方を話し合うための緊急の保護者会を開いた。あり方が話し合われたと同時に、トラブルについても話題になり、その発端になっている7人の生徒にも、顧問から指導の手が入ることとなった。

部活動での問題はおさまったが、7人の子どもたちを中心に、日々の生活では、C子を対象とした「いじめ」やトラブルへと発展し、C子は欠席しがちとなった。C子の母親の要求で、緊急の学級保護者会がひらかれ、いろいろ文句や不満が出された。学級での直接的なトラブルは減少したが、無言の圧力や威嚇は依然

ため、遅刻、早退をしがちであったが、学校を休むことは少しずつ減少していった。学級では、周りに心配りのできる女生徒を配置し、人間関係に配慮した。しかし、転入当時は、教師への提出物を紙ヒコーキで手渡したり（紙ヒコーキ事件）、小説の中での先生と生徒

と残り、C子は学級へ行きづらくなった。その状況下で、母親は、C子が病弱であることから、「心身の安全」と「学力」の保障を中心とした5項目の要求書を突きつけた。丁寧な家庭訪問、補充学習、さらにはC子から教師の目が離れないよう見守り続ける体勢づくりで、学校側としては、その要求に応じた。欠席しがちであったが、何とか、1年生を送ることができた。

との関係の話を実話として聞き間違えて噂を流したり（小説噂事件）、周りの生徒が嫌っていると誤解して保健室に相談したり（周囲の生徒がC子を嫌がっているとの誤解事件）など、トラブルが絶えなかった。その都度、担任は、関係の生徒を集め、その解決にあたるだけでなく、家庭への連絡を密にした。また、その折には、同じ学年の先生から報告を受けている頑張っている情報も添えて伝えた。家庭への連絡は、ほぼ、学年主任とともに、週に数回に及ぶことがあった。こうした取り組みは、教育委員会相談室も詳細に報告された。

転入後、1ヶ月が過ぎ、子どもと母親が、市相談室に最初の報告に行った。また、学校側も、その間の指導経過を報告した。両者の間に、情報のズレもなく、困っていることもなく、学校の温かな対応に感謝している言葉が語られた。

3学期にはいると、周りとのトラブルも減り、欠席日数も激減した。部活動では、美術部に所属し、2月の公民館祭りでは初めて作品を出品した。

3年生になると、全く、他の生徒と変わらないようになり、欠席日数はなくなった。

（2）事例解釈の視点1：前在籍校では、C子とその母親の心にはどんなことがおきていたか。

① C子にどんなことが起きていたか

前在籍校の美術部でのトラブル及び学級での出来事について、前在籍校の教頭から資料15のような報告を受けている。

このことから次のようなことが起きていたと考えられる。

C子は、気が弱く、周りに流されやすい生徒である。母親は、C子が小学校時代PTA役員を務めるなど、知的でしっかりした性格である。家庭においては全てを母親が仕切っていて、C子は母親の強さに押されて気軽に話ができる状況ではなかった。

気の弱いC子は、部活動内でのトラブルが表面化し始めたことで、部活で勢力を持っている7人から離れた。それが、7人からのターゲットとなり、いじめへと発展していった。さらには母親が学級保護者会で文句を言ったり主張をしたりすることで、学級の問題が表面化し、周りの子どもたちはC子から離れはじめた。その結果、C子は孤立して、学級での居場所がなくなっていった。学級保護者会によって、表面的にはトラブルはおさまったが、陰に隠れての威嚇が続き、C子は保健室に逃げたり、欠席がちとなったりした。母親が、こうした状況下で、何とかしようと学校に要望書を突きつけた。それにより、教職員によってC子に配慮された扱いがなされ、それが、かえってC子の孤立化を強めていった。母親が学校に働きかければかけるほど孤立化が深められ、それが繰り返されて「孤立化の循環」へと陥っていったのである。

② 母親にはどんなことがおきていたか。

母親は、部活動でのトラブルについては、部活動保護者会で初めて知った。C子から7人との関係を言われていないため、C子がトラブルとは関与していないと思っていた。その後、C子がターゲットなり、保健室に逃げたり、欠席がちになったりしてあわてだした。誰にも相談できず、部活動保護者会の後ということもあって、学級保護者会を開催してくれるよう要求した。保護者会で話し合っても、C子の状況は変わらない。かえって、前述のように7人からターゲット化され関係が悪くなっていく。その結果、学校側に5つの要望書が突きつけられた。学校側は要望書に応えるよう一生懸命取り組むが、それがかえってC子を集団から孤立化させていった。状況は改善されず、母親の学校側への信頼は薄れていく。学校に言えば言うほど、C子の状況は悪くなり、「学校への不信感」だけが高まっていった。これが繰り返されて、「不信感が溜め込まれる循環」が生まれた。

学年が変わり、担任、生徒も変わった。当初は、教師側の配慮もあって、比較的安定した日々が送られていた。6月に、男子とのトラブルを契機に、C子は避難として保健室に逃げ不登校気味となった。学年が変わり、担任が変わっても、トラブルは何ら変わらないことに、母親は不信感が一段と強くなり、C子を転校させるということとなった。

(3) 事例解釈の視点2：転校によって、C子とその母親にどんな変化があったか。

前在籍校での、C子への「いじめ」による「孤立化の循環」さらには、母親の「不信感が溜め込まれる循環」は相互に関連し合い、どんどん深みに入っていったと考えられる。この循環は、新たな環境（転校）に入ったことで止まった。また、第三者機関（教育委員会相談室）との連携によって、「学級システム」「学校システム」「外部システム」が構築され、よりよい循環が生み出された。(Fig. 11)

なお、ここでいう「システム」とは、単なる人の集まりではなく、ある特定の意図性・目的性、さらには関係性をもった人の集まりのことである。

学級内においては、「紙ヒコーキ事件」や「小説噂事件」、さらには「周囲の生徒がC子を嫌がっているとの誤解事件」など、些細なことでも、担任が全て介入し、生徒間のトラブル解決の手助けをして関係を繋いでいった（学級システム）。その結果、学級にはどんな些細なことでも先生に相談すれば解決が図られるという雰囲気が生れていた。また、このようにトラブルがあっ

たときは、直ちに、C子より先に母親に、事件の詳細とその対応について報告していった。

学校全体で担任を支えるシステムが、この学校ではすでに構築されていた。ある一定期間、学級担任を代える「学級担任フリーディ」を設け学年団で担任を支えあったり、生徒の様子を見合う「ぶらっと参観」を日常化し、生徒の情報を共有化する学校体勢ができていた。

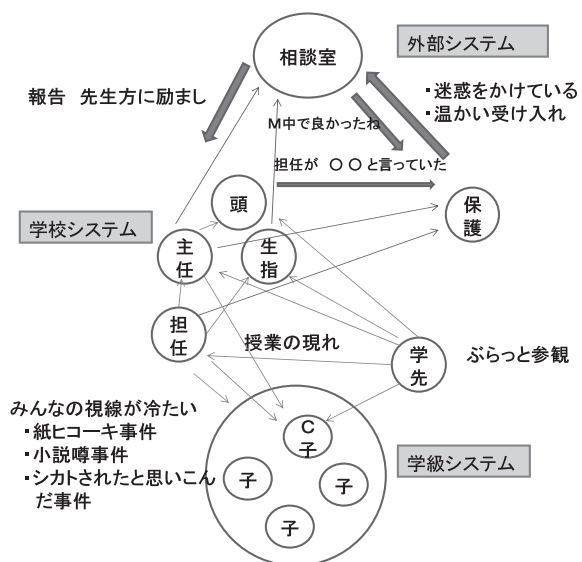


Fig. 11 新たに構築されたシステム

C子への指導においては、「ぶらっと参観」でいろいろな教師より集められたC子のよい情報を家庭に連絡し、よりよい母親との関係づくりに努めた。また、転入当初は早退遅刻が多く、その度に、母親がC子を学校に送り迎えをした。その折に教頭は、先生方から集まってきているC子の頑張っている情報を、母親に報告していった。それにより「母親―担任―担任外の先生（教頭等）」の3者間に、学校全体でC子を見守っているというシステムが機能した（学校システム）。

転入一ヶ月後、これまでのC子の現れやその対応について、教育委員会相談室に詳細に報告した。こうした報告が母親にも詳細にされ、しかも対応に温かさがあることから、母親からの感謝の声が、市教育委員会相談室を通して（資料18 C子の母親 相談室との最初の面談）、学校に伝えられた。このことは教職員にとっても励ましとなった。

このように、両者の関係がよりよくなっていくためには、学校としては、詳細で正確なC子の現れとその対応を、相談室と母親に報告することが重要である。また、学校には直接言いにくい母親の気持ちや悩みを相談室を通して伺い、謙虚に対応していくよう努めることも大切である。第三者機関である教育委員会相談室は、学校と母親の抱えているN感情を繋ぎ、それぞれのおかれている立場とその努力を相互に理解できるように機能した（外部システム）。

転入後、こうした取り組みが約半年続いたが、その間、母親の不平不満が相談室に向けられることはなく、C子の生活が安定して行った。

資料18 市教育委員会からの報告

母親は、次のように言っていた。

- ・子どもの体調が優れなく、完全な登校ができなく、申し訳なく思っている。
- ・いろいろなことがあるたびに、学年主任と担任が家庭訪問してくれ、その対応を詳細に説明してくれる。その対応の仕方のきめ細やかさと温かさ感謝している。
- ・娘の早退、遅刻で学校に行くと、教頭さんをはじめ多くの先生方が非常に温かく対応してくれる。
- ・前学校を転出するときには、事務的で、冷たい印象であったが、本校は、どんな些細なことでも教頭さんを中心に、出迎えていただいたり、見送っていただいたりして温かな対応で、転校してよかった。

以上から、本ケースは、学年・学級内で受けた「いじめ」とそれを何とかしようとする母親の学校への働きかけがC子の「孤独化の循環」、母親の「不信感が溜め込まれる循環」を生み出し、N感情がためこまれていったという問題構造を想定することができる。それに対してC子を取り巻く環境を新たにすることと、その新しい環境の中で、「学級システム」、「学校システム」、さらには「外部システム」が重層的に機能したことで、問題が次第に沈静化した事例であるにとらえることができる。

Ⅲ 生徒手指導のありかたへの提言

3つの事例への取り組みから、生徒指導体制の確立について、いくつかの提言を行う。

- (1) 原因探しをするのでなく、事例の中で起きている「N感情を生み出す循環」を探り、それに基づいて対応を考えることが大切である。

教育現場では、生徒指導上の問題を解決するとき、問題の原因を探り、それに対応した解決策を考え実行することが多い。しかし、こと生徒指導上の問題は、直線的な因果律で成立していることは少なく、いろいろな要素が複雑に絡んで起きている。トラブルが起きたとき、その原因を探すことも大切であるが、それ以上にその問題を生み出しているいろいろな要素の関係や成り立ちを探り、その中に潜む関係性を改善することが大切である。

すぐキレるA男とその母親の場合、A男の気質や母親の家庭生活でのあり方に原因を求めがちになる。そのことも大切であるが、A男がトラブルを起こしたときのA男の内的感情の理解とそれに基づく介入の仕方（A男が12年間で溜め込んできた切ない感情の理解とそのことに配慮した介入）こそが、「キレることでよりいっそう傷ついていく循環」や、「母親のA男への無力感が強められる循環」を和らげ、改めていくものと考えられる。また、キレていないときの状況を大切にA男と母親とに接し、家族関係や教師・友だち関係などの人間関係づくりに、学校全体が丸となって取り組んだ。その取り組みが、結果として「キレることで傷ついていく循環」や、「母親のA男への無力感が強められる循環」を弱めることに結びついたと考えられる。

また、B子についても、母親の生活のあり方にB子が抱えている問題の原因を求めがちになるが、それは母親自身が置かれている特殊な状況に由来する問題であり、学校側の支援だけでそう簡単に解決できるものではない。母親自身の生活を改めることよりも、B子と母親とが定期的に会うことを約束することが、「B子の母親への思いの循環」や「母親の自己嫌悪の循環」を弱めることにつながり、その結果問題の深刻さが和らいで行ったと考えられる。

C子とその母親についても、気の弱い何でも逃げ出してしまうC子の気質や、母親が学校側を厳しく追及する特異な行動パターンを持つことに問題の根本的な原因があると見ないで、むしろ、その時の学級、学校の状況下で生み出された循環（「孤立化の循環」「不信感が溜め込まれる循環」）の中で苦しんでいる子どもとその母親としてとらえることが大切である。この循環を断ち切るには、新たな状況下（転校）で生活し、母親を支える第三の機関を設定することが必要であると考えて、対応方策を考えた。

問題が起きたとき、多くの教師たちは、直ちにその原因を探すことに意識が向かい、責任がどこにあるかを議論しがちである。また、その原因を探る場合、ともすれば経験則で考え、結論づけることも多い。それにより、かえって子どもや保護者を傷つけてしまうことも多い。生徒指導上の問題対応で大切なことは、原因探しをして、善し悪しの価値判断をすることではない。事実在即して、そこではどんなことが起きているか対象者をめぐる状況や人物など問題の構成要素間関係を把握し、それを望ましい方向に改善し、新たな関係性を構築することである。人間は誰もが自己の問題を解決する能力や意欲を本来的に備えていると考え、それが発揮できるよう新たな関係性をつくるのが支援を行う者にとって大切である。

これら3つの事例に、最前線で指揮を執っていた教頭に、「数多くの生徒指導上の問題に対応し、その経験から生徒指導体勢を確立するときどんなことが大切だと思いますか。」とあらためて質問した。すると次のような答えが返ってきた（資料19）。ここで言う「絵」というのが、問題の成立に関わる要素を循環という視点から整理したものに該当する。この循環を理解することが、関係者による共通理解の基礎となり、その上にたって、その循環を和らげたり、止めたり、さらにはその循環を成り立たせている関係性を改善することが、生徒指導上の諸問題を適切に理解し、対応する際の基本的構えとして必要ではないかと思われる。

このとき大切なことは、問題を循環構造として考えるとき、それに関わっている人たちのN感情を中心とした循環をどのように弱め、あるいは遮断するかという点である。そのための有効な考え方は、“人間は、自分の抱いているN感情が受け止められ癒されることで、新たな意欲がわいてくる。その意欲こそが、自己を変え課題解決へと繋がっていく。”という人間観を持つことである。生徒指導上の諸問題を解決するための道は、N感情を受け止め、悪い循環を修正することを保障する周りの関係性づくりである。

資料19 聞き取り調査

「生徒体勢で大切なこととは」

- ① 教師の経験だけで背景を勝手に想像するのではなく、生徒や母親との実際の会話から背景であろう要素を探る。その時、母親や生徒を指導してやろうと思わないで人間関係づくりを第一として考える。人間関係ができあがると意外と子どもも保護者も本音を語ってくれる。また、人間関係をつくるためには、子どもや保護者の弱い部分を攻めないで共感的対応をすることが大切である。
- ② 問題の要素が浮かび上がったら、それをつないで「絵を描く」（物語を組み立てる）。絵や物語が描かれると、必然的に、関わり方や対応が見えてくる。この物語や絵を共有することが、共通理解であり、それによって組織的な生徒指導体勢ができる。
- ③ 保護者の立場に立って、解決への取り組みを具体的に進める。

(2) 生徒指導上の問題を解決するには、問題を取り巻く人間たちの間の関係性を再構築することが大切である。その関係性は、重層的で、しかも、それらが有機的に機能するよう構築することである。

A男、B子、C子の3つの事例に共通していることは、その生徒たちを取り巻く人物間に好意的な関係性が形成されていることである。

好意的な人間関係を構築するための最小単位は、「自己－他者－第三者」の3者の関係（これを「人間関係のトライアングル」と呼ぶこととする）である。自己と他者の2者間が良好の関係になるためには、相互に意図的に関わり合いをしなければならないが、なかなかそのようにならず、多くの場合は、誤解、対立が生まれる。それがトラブルとなる。その時、第3者が二人の間が良好になるよう介入することでトラブルが改善される。すなわち、二者関係で生じたトラブルに対し、第三者が助言、提案、忠告、指示、再解釈など、その場面状況や人物の特性に応じた介入を行うことで、問題の解決や軽減に向かって行く。

学校教育現場には、人間関係のトライアングルが数多く存在する。中でも、「生徒－生徒－生徒」関係が中心であるが、生徒同士では解決の道筋が必ずしも明確ではなく、トラブルを解決して良好な関係をつくることは難しいことが多い。そこで生徒間に担任が入って関係を結ぶ「生徒－担任－生徒」のトライアングル（学級システム）が機能することが大切である。その「生徒－担任－生徒」を支えるために「生徒－学年主任－担任」「生徒－保護者－担任」「生徒－教頭－担任」など（学校システム）のネットワークが必要となる。さらに、それらの人間関係トライアングルがより機能するには「保護者－行政機関－学校」（外部システム）などの人間関係トライアングルが存在することが必要となる。

A男について言えば、今まで、家庭で一人であることが多い状態から「母親－義父－弟」「母親－A男－義父」などの関係が構築された。また、学校生活では、先生や友達との関係が

薄かった状態から、「A男－担任－母親」「A男－教頭－母親」の人間関係トライアングルが構築された。これらの立場の人が、それぞれ、A男のN感情に寄り添うように関わったことが、A男のキレが少なくなり、A男とその母親の中にあつた否定的な循環を和らげていったと解釈できる。

B子について言えば、「B子の母親への思いの循環」や「母親の自己嫌悪の循環」に、担任と学年の先生がそれぞれ独自に関わっていたものが、話し合いの場を通して、「父親－母親－B子」、「父親－B子－教頭」、「B子－教頭－母親」、「B子－担任－教頭」や「B子－母親－担任」などの何種類もの人間関係のトライアングルが新しく構築された。その結果、いくつかのトライアングルにおいてプラスのつながりが形成されたことで相互に信頼関係が生まれたことがB子と母親の中に起きていたマイナスの循環を弱めていったと考えられる。

「いじめ」にあい不登校気味になったC子、それを抱え誰にも相談できず悩み、要求を学校に突きつける母親、第3の事例の中心人物はいずれも孤立した状態であった。この状態から、生徒と生徒のとの関係を繋ぐ担任（学級システム）、その担任を支える学年団の教師と教頭など（学校システム）、そうした教師集団と母親を繋ぐ教育委員会相談室など（外部システム）が、重層的に形成された。この重層的システムが構築されたことによりC子とその母親を支えるトライアングルが形成され、しかも、そのシステム間を、詳細で温かな情報（たとえ、トラブルに関わる情報でも前向きにとらえ直された情報）が流れたことで、相互の人間関係に信頼感が生まれ、よりよい循環が生まれたものと解釈できる。

これら3つの事例における人間関係のトライアングルシステムが機能したのは、下記のことが全校体勢で日常的に取り組みされていたという事実によることを見逃すべきではない。このような基盤となる考え方や行動の仕方を学校が備えていたところに、重層的な取り組みが機能するための条件が存在していたと考えることができる。

すなわち、本稿で取り上げた3つの事例の分析から、生徒指導体勢が機能するには以下のことが前提として大切であると指摘できよう。

- ① 日々の学級内に生ずる問題に対して、どんな些細なことでも、全て学級担任が介入し、それに関わってる生徒たちの関係づくりに努めた。特に、その時、大切としていたことは、善し悪しで問題解決を図るのでなく、生徒たちが抱えているN感情を相互に理解し合うことを大切にした。互いの苦しい気持ちが分かり合うと、生徒たちは自らの力で問題解決を始める。そうした力を大切にしていた。
- ② 定期的に学級担任を代える「学級担任フリーディ」を設けたり、生徒の様子を見合う「ぶらっと参観」を日常化したりして、一人の生徒を全校の先生で指導する体勢づくりに努めていた。
- ③ 「弱さで結び付き合い、できることで貢献しあう関係づくり」をスローガンに、生徒、保護者、教員の関係構築に努めていた。特に、「人間は暗愁を抱いた存在である」（五木寛之）という人間観を学校経営の中心にすえて、生徒、保護者、教員のN感情を分かり合う関係づくりに全職員で取り組んできたことは、システムを機能する上で大きな役割を果たした。

IV おわりに

第1筆者が中学校の管理職を務めている間に遭遇した3つの事例に基づいて、あらためて生

徒指導上の問題構造を理解するための重要な視点として、問題の原因探しではなく問題の特徴付ける構成要素間の循環としてとらえ直すことの重要性を指摘した。また、3つの事例が問題の解決に向けて動き出したときには、悪い循環を弱めたり、対象となった生徒がよい現れを示すような方向に彼（彼女）を取り巻く人間関係が変化していること、すなわち人間関係のトライアングルに質的な転換が生じていることが示唆された。問題を循環構造としてとらえるとともに、解決に向かうためには人間関係ネットワークの再構築が必要であることを示すことで、今後の学校における生徒指導・教育相談システムの確立に向かう手がかりを提示できたと思われる。

生徒指導上の諸問題への対応は、ある意味で人間対人間の対決という面がある。問題や悩みを抱えた生徒も、彼らに対応する教師も、いずれも生身の人間であり、それぞれ固有の人格の持ち主である。したがって、問題を抱えた子どもや教師自身の性格や特性によって、早い段階で解決するか長引くか、また、どのような解決パターンをたどるのかは千差万別であるといつてよい。言い換えれば、生徒指導上の問題の解決パターンは、関係する子どもや教師の個人差要因によって定まる面も大きい。そこで今後は、生徒指導上の問題への対応において、人間関係のネットワークの中心にいる教師、またそれを支える教師は、どんな考え方や行動傾向を持っているかについて検討し、「教師の性格や特性の何が、生徒指導体勢を確立する上で、大切となってくるか」を明らかとしていきたい。

引用・参考文献

- 大河原美以 2004 「怒りをコントロールできない子の理解と援助」金子書房 p.25
吉川悟 1999 「システム論からみた学校臨床」金剛出版
宮田敬一 1998 「学校におけるブリーフセラピー」金剛出版
東豊 2010 「セラピスト誕生」日本評論社
文部科学省 2011.3 「生徒指導提要」
国立教育政策研究所生徒指導研究センター 2011.3 「生徒指導の役割連携の推進に向けて～生徒指導主事に求められる具体的行動～」

